フルベッキ研究の新たな可能性

村　瀬　寿　代

はじめに

オランダ改革派の宣教師フルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1898）は1859年（安政6年）の来日以来，様々な形で日本の近代化に貢献した。特に明治初期において，その業績は教育だけに限らず，南校（後の東京大学）の管理，岩倉使節団派遣の構想，ドイツ医学導入はじめ数多くの建白，留学生派遣，お雇い教師雇い入れ，翻訳等々枚挙に暇がないほど多岐にわたる。だが，残念ながら従来のフルベッキ研究は，明治政府への貢献が中心であったり，ある一部分のみ取り上げるといったものが大方で，総合的な研究はあまりなされてこなかったようである。フルベッキ本人が多くを語る人ではなく，残された資料も少ない上，外国人であったために事実が前面に出てきにくいという事情があってのことであろう。しかし，先達たちの数少ない研究さえ，そのほとんどは十分に調査され，考察されたとは言えないものが多い。しかもそれを一歩進めて検討，批判，展開するといった試みがなされることも今までなかった。信頼性の乏しい過去の資料をそのまま踏襲し，現在に至っているのが現状であるように思われる。

フルベッキ研究の基本的な文献として『フルベッキ書簡集』[1]，『明治維新とあるお雇い外国人フルベッキの生涯』[2]，*Verbeck of Japan*[3] が挙げられる。

『フルベッキ書簡集』はフルベッキがアメリカ伝道局に宛てた書簡を和訳したものであるが,「英語を日本語に置き換えた」だけであるという印象は拭えない。登場する人物名を実際はどの人物であるか調査せず漢字を充てただけであったり,他の文献を用いて確かめる作業などはなされていないようで,誤訳も目立つ。『明治維新とあるお雇い外国人フルベッキの生涯』の前半部分の多くはグリフィスの著書 *Verbeck of Japan* からの引用のようだが，グリフィスの言葉をすべて鵜呑みにし，つじつまの合わない箇所や明らかな間違いなどもそのまま信用してしまい，年代・日付の間違いも見受けられる。最初のフルベッキの伝記である *Verbeck of Japan* の著者グリフィスはフルベッキ個人をよく知り，伝記執筆に当たりフルベッキの家族やその周辺にいた人々から，グリフィスが実際に聞き取りをして資料を借り受けただけにその資料価値は高い。しかし，年代・歴史的記述が不正確で，思い違いやグリフィスの個人的な意見が入りすぎている箇所があるために，後の研究者を惑わせる原因となることもしばしばである。にもかかわらず，従来の研究では *Verbeck of Japan* の間違いを訂正する作業もほとんどなされず，一部分をそのまま引用するに留まり，伝記そのものの評価もされてこなかった。本稿では主にこの三つの文献を中心に，研究者が等閑してきた部分を指摘し，誤りを正し，あるいはより妥当な見解を示すことによって再考を促し「フルベッキ研究」の新たな可能性を探りたい。加えて，諸説あって設立時期が曖昧である佐賀の藩校，致遠館の成立と経緯を述べ，大隈重信が「致遠館という名称の学校では学ばなかっただろう」ことを明らかにする。また，フルベッキが幼い頃から属していたモラヴィア教会については詳しく触れられたことがないので，モラヴィア教会の性格を述べるとともに，フルベッキにどういった影響を及ぼしたのかを考える。

1．フルベッキ周辺の人々に関する記述

幕末におけるフルベッキと佐賀藩との繋がりは密接である。フルベッキは佐賀藩が長崎に設立した致遠館で主に佐賀藩士たちを教育し，藩士たちの中には教えを受けたことがきっかけで，後に政府で頭角を現すようになった者が少なからずいる。後年大隈重信が早稲田大学を設立する際，そのルーツは長崎における佐賀藩の致遠館であったとも言われている。それだけに致遠館設立に貢献した大隈重信，あるいは早稲田大学の歴史を語るとき，必ずと言ってよいほどフルベッキが引き合いに出される。

『早稲田大学百年史』には1863年（文久３年）秋，上海から長崎に戻ったフルベッキのもとに佐賀藩士，綾部恭と本野周蔵（盛亨）二人の生徒がフルベッキに会いにきたとある。また，長崎に置かれた幕府の学校（済美館）で学んだという佐賀藩士たちの名前が挙がっている。[4] ところが，フルベッキ書簡ではこの二人の生徒は1860年（万延元年）春からフルベッキのもとで学んでいる「政府」の「通訳」で「役所」で働く人物であるとしている。[5] 綾部・本野二人は確かにフルベッキの生徒ではあったが，通訳ではないし政府（幕府）で働いてはいない。本野が初めて来崎したのは1860年９月あるいは10月（万延元年８月）で[6]，この年の春には本野は大坂の緒方洪庵塾で蘭学を学んでおり，この時期に長崎のフルベッキの生徒にはなり得ない。そして，ここに名前の挙がっている佐賀藩士たちが学んでいたのは致遠館であり，幕府の通訳養成として始まった済美館ではない。前号の『桃山学院大学キリスト教論集』で明らかにしたように[7]，この二人の生徒に見合う条件を満たすのは唐通事，何礼之と平井義十郎以外には考えられない。

『明治維新とあるお雇い外国人フルベッキの生涯』に，海上に浮かんでいた聖書を拾い興味を抱いた佐賀藩家老村田若狭が「江口梅亭という家臣を医学研究の名目で長崎に派遣して内容を調べよと命じた。江口はフルベッキに会って海上で拾った書物のことを話した。フルベッキはそれは英語の聖書で漢文に訳されていることを教えた。そこで江口は上海版の漢文聖書を入手し

て若狭に届けた」[8] とある。この箇所はグリフィスの *Verbeck of Japan* にある記述から取ったものと見て間違いないであろう。原文では以下の箇所である。

"He [Murata Wakasa] sent one of his men named Eguchi Baitéi to Nagasaki, professedly to study medicine, but in reality to find out from the Dutch more of the book, and they told him much. When he heard there was a translation of this book into Chinese, he sent a man over to China and secured a copy." [9]

（彼［村田若狭］は家臣の一人，江口梅亭を医学研究の名目で長崎に派遣した。実は本についてオランダ人から更に詳しい内容を聞き出すためであって，若狭はオランダ人たちから多くの情報を得た。若狭はこの本の中国語訳があると聞き，中国に人を派遣してそれを手に入れた。）［著者訳］

つまり，佐賀の蘭医，江口梅亭は長崎でフルベッキに会ったのではなく，オランダ人（the Dutch）から聖書に関する情報を得ようとしたのである。村田若狭が聖書を初めて手にした1854年（安政元年）にはフルベッキはアメリカに滞在しており，来日の気配どころか，神学校にすら入っていない。そして，漢訳聖書を手に入れるため若狭が中国に派遣したのは江口であるとは書かれておらず，単に「ある人」（a man）なのである。江口がフルベッキに教えを受けたという可能性は否定できないが，致遠館の佐賀藩士の名簿に江口の名前はない。江口が確実にフルベッキの生徒であると伝える文献は存在しないようである。

江口梅亭とは名を保定といい，久保田の人であった。父もまた医をもって仕え，江口は若くして長崎に遊学し，佐賀藩でも重要視されたというほど優れた医者であったらしい。明治４年には佐賀医学教諭となり，明治11年には佐賀病院長となった。手腕はあるが「いひゅう梅亭」とあだ名されるほど気むずかしいところがあったようである。明治38年，67歳で病没と墓碑にあるので，生まれは天保12年ということになる。[10] フルベッキから洗礼を受けた村田若狭の家臣であるので，グリフィスが述べているように，若狭が江口を長崎に派遣して聖書についての情報を得させるということは十分考えられる

が，フルベッキとの関係は明らかではない。

『明治維新とあるお雇い外国人フルベッキの生涯』は江口梅亭に関してだけではなく，フルベッキの兄弟・姉妹についても随分不正確な記述をしている。フルベッキの生年月日を間違って記しているのは論外として，「八人の子供の六番目が〈日本のフルベッキ〉たるギドー・ヘルマン・フリドリン・フルベッキである」[11] と明言しておきながら，登場するフルベッキの姉妹をすべて妹としていて姉妹の数・年齢を全く考慮していない。フルベッキ家の兄弟・姉妹について整理してみると，伝記の著者グリフィスによると，ギドー・フルベッキは８人兄弟・姉妹の６番目であるという。兄姉５人は時期が来るとアムステルダムのルター教会の伯父のもとに送られた。故郷の町オランダのザイストに残り，モラヴィア教会で堅信礼と聖餐式をともに受けたのは "younger brother" とあり[12]，ギドーには弟がいると明確にわかる。フルベッキ死後に娘のエマは「叔母のゼルマ，この人はフィラデルフィアのヴァン・デュール師の妻で，わたしの父の末の妹ですが，色々と話す材料を持っているのです。この叔母は古いコッペル（祖父の家の姓名）家の八人の子の生き残っている唯一人で，一八三三年には生まれたばかりの赤坊でした」[13] と語っている。フルベッキは1830年生まれであるので，セルマ［Selmaと綴るがオランダ語の発音ではゼルマよりはセルマに近いので，セルマとする］が約三歳年少の一番末の妹であるのは明らかである。セルマ以外にミナ，アリネという名の姉妹が *Verbeck of Japan* に登場するが，この二人は姉でなければ弟妹の数が合わない。『明治維新とあるお雇い外国人フルベッキの生涯』では，この姉たちまでもどういうわけか妹として紹介している。

また，モラヴィア派の指導者ツィンツェンドルフ伯爵は1700年に生まれ1760年に死亡しているにも関わらず，「一七七三年に［ツィンツェンドルフ］伯爵はオランダにモラヴィアン派の教会を創立した」[14] などと歴史的事実をねじ曲げるような記述をしながら，著者はその矛盾に気がついていない。事実は，モラヴィア派がザイストを購入したのはツィンツェンドルフ生存中の1746年である。グリフィスが間違えた箇所，あるいはグリフィスの説明が複

雑である箇所を，考えずもせずにそのまま引用したことが原因で生じた誤りである。

フルベッキは日本の若者をアメリカで学ばせるために多くの留学生たちを送った。彼らはフルベッキからまずオランダ改革派の伝道局主事ジョン・フェリスに紹介され援助を受けたので，渡米する日本人の名前は伝道局への書簡に逐一報告されている。だが，『フルベッキ書簡集』では留学生たちが実際誰であったかの確認を省いているようで，任意でローマ字表記の名前に漢字を充てたものが見受けられる。一例を挙げれば，1870年９月21日付書簡で「華頂宮殿下，以下，柳本，白根，高藤，藤倉の諸氏からあなたに宛て紹介状を依頼されました」[15] と，アメリカに向かう日本人を，伝道局主事ジョン・フェリスに紹介している。*Verbeck of Japan* ではこの部分は "The bearers, his Highness Kacho-no-Miya, and Messrs. Yagimoto [Yanagimoto], Shirané, and Takato have requested me to furnish them with letters of introduction to you." [16] とある。Takatoとは高藤ではなく，福山出身で南校生徒であった高戸賞士（江木高遠）である。また，Shirané を白根としており，山口出身の留学生である白根鼎蔵と錯覚させるが，白根鼎蔵は1872年に吉田清成に同行して渡米しているので[17]，1870年渡米には疑問が残る。グリフィスは，その著書 *Rutgers Graduates in Japan* でこの Shiranéついて次のように述べている。

"Shumma Shirané (Shiuma Shirané). After preparatory study at the grammar school entered Rutgers College in 1871, remaining less than one term. He is now a ship-builder at Kanagawa, Japan." [18]

（シュンマ　シラネ。［ニューブランズウィックの］グラマースクールで学んだ後，1871年にラトガース大学に入り，在籍は一学期に及ばなかった。彼は現在，日本の神奈川で造船業を営んでいる。）［著者訳］

1870年に渡米した Shumma Shirané とは白根ではなく，白峯駿馬であるのがこの説明からわかる。白峯は長岡藩士で，江戸に出て勝海舟門に入り航海術を学んだ。彼は1865年６月（慶応元年５月），坂本龍馬らと来崎し，亀

山社中をおこすとともに社中の中核を形成し，後に海援隊に属する。[19] 長崎では陸奥宗光らとともにフルベッキから教えを受けた。後に海援隊士の千屋寅之助（菅野覚兵衛）とともにアメリカに留学するが，坂本龍馬生存中に起こった，いろは丸事件の賠償金を留学費用に充てたという。[20] 彼はニューヨーク海軍造船所で造船技術を学び，帰国後造船の先駆をなした人物である。

一見，名前の誤表記など重要ではないように思われるかもしれない。しかし，白峯は海援隊士であり，他の海援隊関連の人物たちとともにフルベッキの下で学んでいた形跡がある。もしもフルベッキが白峯の留学を斡旋したとすれば，フルベッキと海援隊との親密さを示す証拠の一つとも成り得る。また，白峯の渡米が1869年（明治２年）であるのか1870年（明治３年）であるのか，従来はっきりとしなかったが[21]，このフルベッキの記述は1870年（明治３年）であったと明確に教えてくれる。フルベッキが紹介した多くの留学生を調査することで，日本近代の留学史で不確かであった部分もかなり明らかにできるのではないだろうか。

フルベッキの明治政府での活躍は，来日後上京するまでの約十年間を過ごした長崎で培った人脈なくしてあり得ないと言っても過言ではない。長崎で様々な人物との良好な関係があったからこそ，フルベッキは明治初期において，外国人としては破格の好待遇で政府雇いとして迎えられた。それだけに，人物名を誤表記してしまったのでは，全く無関係の別人と関係を有すると誤解される危険性もあるし，事実が隠れてしまって前に出てこないことにもなりかねない。人物を特定できないのであれば，それを率直に断っておくべきである。

２．フルベッキの佐賀旅行

1859年（安政６年）秋から1869年（明治２年）春までを長崎で過ごしたフルベッキは，この期間四度長崎を離れている。まず，日本の政情が不安定と

なってきた1863年５月13日（文久３年３月26日）に上海に向かったのが一度目である。このときは約五ヶ月間上海に滞在し，同年10月13日（旧暦９月１日）に日本に戻っている。国内では1868年10月（明治元年９月）に大坂を訪れたが，それ以外に長崎を離れたのは，1865年に一度，1868年末頃から翌年にかけて再度招かれた佐賀への旅行であった。

二度目の佐賀旅行について，『フルベッキ書簡集』巻末の年表では1868年１月（慶応３年12月）に「一月佐賀藩主の招きで佐賀に行く」[22] としていて，これが通説となっているようである。ところが，この時期佐賀の前藩主，鍋島閑叟は体の具合が思わしくなく，客を接待するどころではなかったようだ。1868年１月20日（慶応３年12月26日）に大隈重信は鍋島閑叟に面談しているが，大隈はそのときの印象を「ところが，この日，その前に出て，［鍋島閑叟の］病容を仰ぐと，聞いた以上に衰弱して，寒さがひどく身に沁みるらしい様子で，火鉢にしがみ付いてゐる姿が痛々しく，君［大隈重信］の眼に映った」[23] としている。病はかなり重かった様子である。

そして，『鍋島直正公伝』では明治元年11月のこととして次のように伝えている。

「（上略）翌二十日［明治元年十一月］は公［鍋島閑叟］神野別荘に赴き，長崎の致遠館に教鞭を執りたる米国の牧師フルベッキの，友伴数人と佐嘉に来りたるを招き，面談して之を饗せらる。フルベッキは慶応二年にも領事と共に来遊したることありて，今は第二回の来遊なり」[24]［常用漢字に変換］

鍋島閑叟は明治元年11月20日（新暦1869年１月２日）にフルベッキを招いていた。1868年12月18日（明治元年11月５日）発信のフルベッキ書簡でも，「年末前に肥前を短期間，訪問しましょう」[25] とあるので，十日ほど前には佐賀行きが予定されていた。では何故，フルベッキの二度目の佐賀訪問が1868年１月とされたのであろうか。これはおそらく，1868年１月17日（慶応３年12月23日）付の，次のフルベッキ書簡から推定されたものであろう。

「前文で申し上げたように，わたしがバプテスマを授けた一人が，その役職を辞し自由に旅行し得るようになるから，わたしに会いに来ると申して来

ました。その後わたしに手紙をよこし，藩主が，国の現状において役職の辞任を承認しないとのことでした。その理由は，彼が肥前藩の家老衆の最長老であったし，他のものは比較的に若いからだとのことです。一昨日，わたしの所に使をよこし，藩主自ら多分学校の問題ならびに藩の会議についてわたしと会見したい，そして，もしわたしがその招きに応ずるならば，汽船をさし向けてわたしを迎えたいとのことでした。たぶん来週，わたしは肥前に行けるでしょう。佐賀まで汽船で一日かかります。帰航に一日，同地に一日滞在するから，三日かかるわけです。(下略)」[26]

「前文」とは1867年10月19日付書簡を指しているものと思われる。「バプテスマを授けた一人」とは1866年５月20日にフルベッキから受洗した佐賀藩家老，村田若狭である。佐賀藩がフルベッキに何かと親密に相談していたことがうかがえる興味深い書簡だが，ここで問題となるのは「たぶん来週，わたしは肥前に行けるでしょう」とある箇所である。この書簡の発信の新暦１月17日は週末の金曜日であるので，この時点で翌週の佐賀行きはほぼ決定していたのだろう。だが，たとえ旅程まで決まっていたとしても予定は予定であり，実行されたかどうかの記述はどの書簡にもない。

前述したように，鍋島閑叟は重い病で臥せっており，とても客を招く状態ではなかった。『鍋島直正公伝』ではその約一年後，1869年１月２日（明治元年11月20日）にフルベッキを招き，これが彼の二度目の佐賀訪問であると明確に言っているのであるから，こちらがより妥当なフルベッキの佐賀訪問の日付ではないだろうか。『フルベッキ書簡集』では，フルベッキがいう予定の確認を怠り事実としてとらえ，佐賀側の事情を考慮することなく決定してしまっている。

３．"Verbeck of Japan" について

『お雇い外国人⑪政治・法制』では，グリフィスが岩倉具視から直接聞い

た話として，次のように紹介している。

「グリフィスの伝えるところによると，岩倉はきわめて重大な国策についても［フルベッキに］諮問したという。あるときフルベッキの応接室で，岩倉が，『有力な諸大名を威圧，服従させる必要があり，そのためには流血をも辞せず断行する考えである』と彼に語っているのをその場に居合わせて，グリフィスは聞いたという。この機密に属する話は，明治二年（一八六九）六月の版籍奉還直前のことであるが，岩倉の彼に対する信任の厚かったことがわかるであろう」[27]

この部分は *Verbeck of Japan* にある以下の箇所からの引用であると思われる。

"In Mr. Verbeck's parlor in Tokio, I was present at an interview between himself and Mr. Verbeck and heard Iwakura say, concerning the measure and the expectation, that coercion of some of the daimios would be necessary, 'We were prepared to shed blood and expected to do it.' " [28]

しかし，グリフィスが直接居合わせて聞いたのが「明治二年（一八六九）六月の版籍奉還直前のことである」というのは明らかに間違いである。グリフィスの来日は1870年12月29日（明治３年11月８日）であり，版籍奉還が許可された明治２年６月にはまだ来日していない。確かにグリフィスはこの記述の前後で版籍奉還に関して述べているが，この引用箇所が版籍奉還直前であり得るはずがなく，グリフィスが廃藩置県と混同したものと考えられる。

グリフィスは年代・日付に関しては非常に無責任であるので，余程読み手の注意を要する。例えばフルベッキは1881年11月23日付書簡で，1890年（明治23年）に帝国憲法発布と議会開設の発布があるため政治学の講義増加を要求された。あまりにも時間を取りすぎるので，華族学校も含めてすべての講義を受け持つのを辞退する，と報告している。[29] つまり，長年お雇いとして働いてきたフルベッキが，ついに全面的に世俗の仕事を断り，宣教の仕事にのみ従事する決心をしたと述べているのである。ところがグリフィスはどういったわけか，この書簡を引用した後に，1881年９月９日付書簡の一部をつ

け足してしまった。[30] そして，華族学校の講義は辞めないで今後も続けていくかのように伝えている。事実は9月9日には，フルベッキはまだ華族学校で教え続けるつもりであった。これはグリフィスの思い違い，あるいは書簡の日付を混同しているために起こった食い違いである。国会開設の詔勅は同年新暦10月12日に出されているので，その後，11月23日付書簡を書くまでの約一ヶ月の間にフルベッキは全部の講義を辞退する決意を固めた，というのが最も妥当であろう。

フルベッキ研究において *Verbeck of Japan* は数少ない貴重な資料の一つではあるが，グリフィスの言をそのまま信用してしまってはいけない。最大の注意を払って扱う必要がある。引用するときはその箇所だけを抜き出すのではなく，全体を通して検討し，前後関係を把握しなければ大きな間違いを犯す危険がある。

4．致遠館の設立

佐賀藩が長崎に置いた致遠館でフルベッキが教授していたことは先に述べた。今まで致遠館に関しては様々なところで言及され，検討も加えられてきた。致遠館設立時期については慶応元年とされたり，慶応二年であったりとする説が最も多い。おそらくは次のような文献からの記述を参考にしたためであろう。『鍋島直正公伝』の巻末の年表には「慶応元年四月，（此頃）大隈八太郎等尽力して，致遠館と称する英語学校を長崎に建つ」[31] とある。また『大隈侯八十五年史』に，「（慶応元年正月頃）小出と三十人内外の学生を連れて，五島町の諫早屋敷に英学館を置き，外国教師を招き，藩の監視を逃れて自由に行動できるようにする。副島二郎（種臣）を監督として迎え，学生は佐賀以外の者も収容して新人材を養う」[32] という記述がある。『フルベッキ書簡集』の巻末の年表では「一八六六（慶応二），佐賀藩立の長崎致遠館の教師に任命され大隈重信，副島種臣らを教える」[33] としている。

おそらく致遠館設立を正確に伝えたものは岩松要輔氏の論文「英学校・致遠館」[34] だけであろう。岩松氏により，鍋島文庫の諸記録から関係資料が集められ詳しく報告された。しかし，大隈重信がフルベッキに学び始めた時期などの詳細は記されていないので，今一度致遠館設立経緯を述べるとともに補足を加えたい。

フェートン号事件の1808年（文化５年）は佐賀藩が長崎警備を命じられていた年である。佐賀藩の守備兵は千人駐屯すべきところ，実質百人にも満たず，なすすべもなかった。佐賀藩はこの事件で恥を天下にさらすこととなる。[35] これ以後，佐賀藩は長崎警備を念頭において教育政策を進め，近代西洋教育もいち早く取り入れた。長崎海軍伝習所に最初参加した伝習生は，佐賀藩からが最も多く四十八名を出している。[36] 1860年（万延元年）の遣米使節にも小出千之助はじめ七名が参加している。[37] 蘭学が始められるのは医学研究からで，医学寮内に蘭学寮を設け蘭学を奨励した。[38] このように佐賀藩は早い時期から西欧事物の導入に関心を示していた。

蘭学寮の小出千之助などの運動で，佐賀藩が最初の英学研究生を長崎に派遣するのは文久元年２月である。佐賀藩士中牟田倉之助と秀島藤之助はともに来崎するが，中牟田の親友石丸虎五郎と馬渡八郎は，その時すでに鍋島閑叟の命で長崎に在った。中牟田・秀島は石丸の案内で通詞三島末太郎や蘭人ホーゲルに入門する。[39] 翌年文久２年２月に，中牟田・石丸らはフルベッキからも学び始め，彼から懇切に指導を受けたという。[40] 海軍に関する研究が目的であったのだが，英学の必要性もまた認められてきたことと思われる。

万延元年の遣米使節の随行員の一人であった小出千之助は，帰国後藩士たちに英学を勧めたが，大隈重信は大いに小出に共鳴し，自らも来崎して英学学修に励むことになる。大隈がフルベッキに就学したのは，おそらく文久元年から元治の頃であった。[41] 致遠館設立に向けての準備段階と言ってよいかもしれない。ここまではどの文献を見ても大同小異であり大筋間違いはないであろう。だが，佐賀藩の援助があるといっても，この頃はまだ規模も小さく個人的に学んでいた程度であり，学校組織ができるには至らない。

『佐賀県教育史』[42] によると慶応３年８月末から９月になって初めて英学を中心とした洋学研究を学校組織にする努力がなされることになったという。また，従来言われていたように，大隈らの要求だけで佐賀が洋学を教える藩校を設立しようとしたのではないようだ。洋書の翻訳作業を一括して行うために，外国人を雇って長崎の佐賀藩領飛地である深堀に蕃学所を設けることになった。慶応３年11月末にはフルベッキ雇用が正式に決定したが，深堀という佐賀藩領内では外国人雇用が認められていなかった。慶応３年12月12日の「請御意」には「當節亜人御雇入　長崎諌早屋敷ニおいて蕃学稽古所被相建候ニ付　左之人々詰方被仰付方ニ者有之間敷哉　御吟味之事」とあり，生徒の名前と年齢が挙がっている。場所は長崎五島町の諌早屋敷と決まった。諌早氏は佐賀藩親類同格であったため諌早屋敷を用いたらしい。「亜人」とはもちろんフルベッキである。ただし，この時の名称は致遠館ではなく「蕃学稽古所」であり，「致遠館」という名称がつけられるのは更に後となる。慶応４年８月25日付の「長崎蕃学所之儀，致遠館と被相改義候事」という仕組所よりの達書によって，よく知られている「致遠館」という名称で正式に呼ばれることになった。明治２年２月に上京するフルベッキが実際に「致遠館」と呼ばれる佐賀藩校で教授したのは，わずか半年足らずで，「蕃学稽古所」時代を入れても，二年半ほどでしかない。

「蕃学稽古所」の生徒たちは三十名と決められていた。ただし，リーダー格の数名を除いてのことである。舎長として副島種臣，その助に大隈八太郎（重信），執法には中野剛太郎，中山嘉源太，堤喜六，副島要作，中島秀五郎が任命されており，学頭，句読師などをおくのはフルベッキの要請によってのことであった。生徒に出入りがあるものの，常に三十人前後の生徒たちが学んでいた。他藩からの参加者もあり，最盛期には百人以上の生徒が集まったという。新政府に招聘されて上京したフルベッキは「三十六名を下らない数の以前の生徒たちが私について江戸に来ました」[43] と報告している。明治２年２月19日，フルベッキの後を追って致遠館生徒二十七名が「英学為研究東京其外遊学被仰付」としてフルベッキについて行く。[44] これら佐賀出身者

たちのほとんどは，フルベッキが聘せられた南校に転校したようで，彼らは南校で「肥前生の一団」と称された。3月になって致遠館から二十七人の生徒補充を藩政府に願い出ているが，受け入れられることはなかった。[45] フルベッキの転出で，致遠館は廃校となりその短い歴史を閉じた。

「英学校・致遠館」で岩松要輔氏も指摘するように，致遠館で学んだとされる相良知安，綾部新五郎，本野周蔵，山口尚芳などの名前は生徒名簿にはない。これら佐賀藩士たちは長崎にあった幕府の学校（済美館）や他の私塾などで学んでいたのだろうか。これらの人物以外にも，致遠館の生徒であったはずの山口健五郎，大塚琢造らの名前も挙がっていない。そうすると，生徒名簿は致遠館で学んだ佐賀藩士すべての名前を記したものではない可能性もある。佐賀側からだけではなく，他の資料にも当たって検討する必要があるようだ。

佐賀藩は早くも文久元年から英学学修のために藩士を派遣していたのだから，正式な学校組織となる以前から，フルベッキの教師としての優秀さに目をとめた大隈ら佐賀藩士たちが，個人的にフルベッキのもとに集まり教えを受けていたことは容易に想像できる。『佐賀県教育史』には「このフルベッキが英学伝習生の教師として雇入についてははっきりした契約ができていなかったものとみえて，慶応三年九月に薩州，土州などから引抜きの動きがあったため，大隈，副島は引留策を藩に申請し，給金約千両をだすことによって決着を得ているようだ」[46] とある。フルベッキの1867年9月7日（慶応3年8月10日）付書簡で次のように記されていることからも，この記述の妥当性を裏付けできる。

「先月，加賀藩主は私が加賀を訪ねたいという意向があるならばと，立派な汽船を差し向けてくれました。彼は日本の藩主の中でも最も裕福で，この地にある学校と同じような学校を設立するために，私に加賀に来てほしいとのことです。大体同様の誘いを勢力ある薩摩藩主や四国にある土佐の藩主，九州の肥前藩主からも受けました。この四人は日本の主要な藩主で，いずれも外国の原理に基づき前進して行くことを望んでいます」[47]

つまり，同様の誘いを「肥前藩主からも受けました」というのは，佐賀が蕃学稽古所にフルベッキを雇い入れたいという意味で，書簡発信の慶応３年８月10日時点では，佐賀とは何ら正式の契約を交わしていないと取れる。フルベッキ自身も「佐賀の学校」で教えているとは一言も述べておらず，大隈重信らの言をあまりにも信用しすぎたために，英語稽古所，ひいては致遠館設立時期が早く言われてしまった。

だが，大隈らは個人的にフルベッキに学ぶだけで満足していたのではなさそうである。早い時期から長崎に学校を置きたいと考えていた。「元治元年八月に，長州は幕軍を防ぐため馬港を封鎖し，他藩の船舶通行を厳禁した。そこで，大隈は九州の貨物を密かに大坂に伝送することを企み，成功の節，長崎に英語学校建築費を支弁させる約束」[48] を商人たちと結んだことがあった。大隈は少なくともすでに元治元年の頃から「長崎英語学校」の必要性を誰よりも考えていたのではないだろうか。慶応末年には一所にじっとしているのではなく，彼は動き出す。フルベッキが1868年５月４日（明治元年４月12日）に「一年あまり前に副島と大隈の二人の有望な生徒を教えました」[49] と言っていることからも，長崎でみっちり学んでいたのは慶応３年の半ば頃までであったのだろう。生徒の一人，牧由郎は当時を回想して「あの頃，三年間，フルベッキは大隈，副島さん等の専任教師といってよい位だ」[50] と語っているので，三年間ほどは教えを受けていた。「専任教師といってよい位」であったのだから，おそらくは1858年（安政５年）設立の幕府の済美館で学んだのではなく，フルベッキのところに赴き直接学んでいたことだろう。大隈の英学学修と言えば，必ず致遠館が引き合いに出される。そして，大隈がその設立に尽力したのは疑いない事実であるのだが，実質上，全くといってよいほど，大隈は「致遠館」という学校で学ぶことはなかったのである。

5．モラヴィア派とフルベッキ

フルベッキはオランダ改革派の宣教師として知られているが，故郷のオランダ，ザイストで属していたのはモラヴィア派の教会である。1852年に渡米してからもモラヴィア教会の宣教師から援助を受けた。モラヴィア派は他宗派に先駆けて海外伝道には積極的であったため，フルベッキがその影響から日本伝道を志したのだというのはよく言われていることである。『明治維新とあるお雇い外国人フルベッキの生涯』ではモラヴィア派に触れてはいるが，*Verbeck of Japan* からの抜粋がほとんどで，その歴史を概略するだけに留まっている。[51]『日蘭学会会誌』所収の「フルベッキの運命」では，フルベッキは「宗教の面ではモラビアン派の影響を強く受けその神学上の寛大さ，宗教心の薄いのはモラビアン派教育を受けたことに起因するという」[52] としているが，具体的にどういう影響を受けたのか，何をとって宗教心が薄いとするのかの説明はない。モラヴィア派について今少し説明を加えるとともに，その後のフルベッキにモラヴィアの教育が及ぼした影響とは何かを考える。

モラヴィア派はフスの流れを汲む一派で，モラヴィア兄弟団（Moravian Brethren）と呼ばれる。しかし，実際にこの派の歴史が始まり今日に至るのは，モラヴィア兄弟団がザクセンの貴族でルター派敬虔主義者のツィンツェンドルフ（Nicholas Ludwig von Zinzendorf,1700-1760）伯爵の保護を受けてから後である。ツィンツェンドルフはザクセンで購入した土地を迫害を逃れて来たモラヴィア派の人々に提供し，宗教的コミュニティーを形成することによって，自らその指導者となり敬虔な生活を営んだ。信徒を年齢，性別，既婚・独身の有無によって分けて住まわせ，子供を寄宿学校に入れるなど，そのやり方は独特であった。だが，現世的な生活を離れ厳格な信仰規律を守って生活をしていたからといって，世俗的な社会を全く否定したわけでも結婚を禁じていたわけでもない。彼はキリストや教会への奉仕が最も重要であり，結婚は二次的な問題であると考えたのである。加えて，信徒を分離させて住まわせるという独自のやり方は，貧困層の信徒たちを短期間で自立させ

るのに効果があり，宣教師となって働く場合に，残していく子供の心配をしなくてよいという利点もあったらしい。[53]

モラヴィア派は一宗派ではあるが，基本的には長老制を取り，ツィンツェンドルフは自身の教会をルター教会とみなし[54]，他宗派を否定しなかった。それどころか彼自身ルター教会から聖職を授けられ，あくまでその枠内での活動であるとして，ザクセンのルター教会から受け入れられるよう努力した。[55] 信徒たちはルター派の人々はルター派に，改革派の人々は改革派に，またイギリスにいるモラヴィア派の人々は英国国教会に属しながら，モラヴィア派の活動に参加することを期待されたのであった。[56] つまり，モラヴィア派は成立当初から超教派的連帯性を保持しており，それを独特で顕著な特徴として発展してきたのである。実際聖職者たちの中には，モラヴィア派にいながらにして他宗派に属していた者たちがいる。[57]

オランダのザイストはモラヴィア教会なくしては語れない町であり，町の発展にも多大な貢献をしてきた。フルベッキは幼い頃から多感な青年期までをザイストで過ごしたので，町の環境や教会から様々に感化を受けただろうことは予測できる。フルベッキの先祖の中には改革派の牧師をしていた者もあり[58]，彼の父はルター派であったので，フルベッキより年長の兄姉５人はアムステルダムでルター教会の牧師をしている伯父に預けられている。[59] 彼は一つの教派にとらわれることなく，他宗派にも密接に触れながら，しかも超教派的なモラヴィアの教育を受けて，自由な宗教的環境の中で育ったのであった。

後にフルベッキはアメリカの長老派神学校で教育を受け，卒業後オランダ改革派の宣教師となる。また，彼の年長の子供たち三人は長崎で聖公会のCMウィリアムズから洗礼を授けられ，彼らは後々までも聖公会を離れることはなかった。オランダ改革派の宣教師が子供たちを聖公会に託すのは，一見フルベッキの磊落な性格を示すかのように受け取られるかもしれない。しかし，宗教的に狭量ではない家庭環境に育ち，特に超教派的なモラヴィア教育を受けたからこそ，彼は他の日本在住の宣教師と比較しても，教派からは

解き放され，宣教をもっと大きな枠組みでとらえることができたと言えるのではないだろうか。グリフィスは *Verbeck of Japan* の中で「彼［フルベッキ］のキリスト教は島国的ではなく，もっと大陸的であった。『福音伝道であればどんな同労者の声にも応じることができた』のである」[60] という。このグリフィスの言葉は，フルベッキの持つ宗教的背景を裏付ける。

「モラヴィア派は神学を持たないのではないか」[61] と批判されることがあるという。また，モラヴィア派は宗教信条や神学を強調してこなかったとも言われている。しかし，教義を軽んじていたのではなく，教会を中心とした生活に力を尽くすこともまた，違った角度からの貢献の仕方であると考えたのである。フス派の兄弟団が形成された1457年当時は，教義よりは道徳的改革を最優先させる必要があり，そうであったればこそ多くの人を引きつけた。[62] 歴史的に見ても，モラヴィア派はどの階級にも，特に下層階級には理解しやすい実践的な方法を用いて発展してきたように思われる。ツィンツェンドルフ自身も知的で難解な正統派を唱えるのではなく，個々がキリストとの霊的繋がりを持つ個人的救済を構想し，情感溢れる〈心の宗教〉(heart religion) を説いた。ツィンツェンドルフの独創的な発想は，おそらく彼が神学校で教育を受けなかったからであるとも言われている。[63] また，限界はあったものの，18世紀当時としては異例なほどに，宗教的指導者として女性を用いた。年齢差や性別によってその宗教的要求が異なるので，その要求によってそれぞれ異なった指導者も必要であるとツィンツェンドルフは考えたのである。[64] このように，モラヴィア派は個人とキリストや教会との繋がりを重んじ，理想的な生活を実践しながらも，超教派的要素をその特徴とし，自由な発想のもとに世界の様々な地域に広がっていった。

フルベッキはもちろん正式な神学教育を受けたのだが，伝道をするにあたって一般の日本人にはなじみのない理論や教義を振りかざすことはなかった。彼は「神の言葉を伝えるために，他の人々が不可欠であると考えたことを必要としなかった。たとえば宣教の手段や方法の詳細な知識。高等批評と呼ばれる，一般には真価を認めてもらいがたい文学的，歴史的聖書研究の結

果を用いること。比較宗教に関すること。しかしながら，このような方法を正当に用いるのは肯定していた」[65] のである。日本在住の宣教師の中には日本の仏教,儒教や国学等々の研究が伝道に役立つと考え学んだ者たちがいた。しかし，フルベッキは日本の宗教の研究を重要視せず，そのかわりに日本人の思想，歴史，風習を学び，わかりやすく気品ある格調高い日本語を用いて人を説いた。優越意識を持ってキリスト教を押しつけるという態度ではなく，日本人が理解しやすい話題と言葉で，日本人の立場に立って伝道するよう心がけていたのである。「フルベッキはイエス・キリストによって語られた福音と神の言葉を一心に信じた人である。正直すぎて言葉巧みにうまく言い抜けることができなかった。彼の中には歴史で育まれてきたキリスト教のゆるぎない精神が強く存在し，それは漠然とした理論で説明できないと考えていた。また，今までの学者たちが解釈してきたものと同じ水準に据える必要はないと思っていた。イエスが説いた神と人，その関係は二千年の間何ら変わっていないと信じていたのだ。この十九世紀間は，特に十九世紀に入ってからは，問と啓示に関して人知の結晶が加えられたのだと理解していた」[66] というグリフィスの言葉は，見事にフルベッキの伝道に対する考え方を言い当てているように思える。

フルベッキは日本人の考えを尊重し，決して宗教を押しつけず，日本の近代化を成就することでキリスト教が受け入れられると考えた。ツィンツェンドルフもまた教義よりは個人とイエス・キリストとの繋がりを重視し，他者を否定せず，個々の信仰の仕方を認め〈心の宗教〉を説いた。ツィンツェンドルフから百数十年を経て後，フルベッキはモラヴィア派の精神を日本に移入しようとしたようにさえ思える。そう考えるとモラヴィア派もフルベッキも決して「宗教心が薄かった」のではないことは明白である。

モラヴィア派とフルベッキに関しては，わかり得ないところもまだまだ多く，目を通せなかった資料は山積みである。従来，モラヴィア派とフルベッキの関連は詳しく述べられたことがなかったので，問題提起の意味で最後に付け加えた。

おわりに

フルベッキに関する研究は少ない。資料が限られているためもあるだろうが，彼は宣教師であるにもかかわらず，お雇い外国人として長く働き様々な方面に関係したために，位置づけが困難であるという理由が挙げられるだろう。だが，幕末・明治初期の日本を考えるとき，忘れてはならない人物の一人であるのは明瞭であるのに，あまりにも等閑されてきた人物なのではないだろうか。フルベッキの全体像を正確に解き明かすことで，日本の近代化の一局面が更に明確に浮き出される可能性は高いように思う。そこで，フルベッキの再評価を促すべく，過去における研究に対する批判を試み，今後の「フルベッキ研究」の可能性を探っていきたく考えた。また，多面的に活躍した人であるだけに色々な視点から見る必要を感じ，フルベッキの宗教的背景に触れた。モラヴィア派に関しては論じるほど知り得ていないのが現状である。しかし，いわばフルベッキのルーツの宗派であるとの考えから何らかの形で触れたいと思い，項をつけ加えた。

〔注〕

1）高谷道男訳編『フルベッキ書簡集』新教出版，1978。

2）大橋昭夫・平野日出雄『明治維新とあるお雇い外国人フルベッキの生涯』新人物往来社，1988。

3）William Eliot Griffis, *Verbeck of Japan*, Fleming H. Revell Company, 1900

4）『早稲田大学百年史』第一巻，早稲田大学出版部，1978，108頁。
幕府の学校である済美館で学んだ佐賀藩士として，大隈重信，副島種臣，石橋重朝，丹羽竜之助，中島永元，江副廉造，中野健明の名前が挙がっている。

5）高谷道男，前掲書，33頁，41頁～42頁。

6）本野亨編纂兼発行『苦學時代の本野盛亨翁』1935，33頁。

7）『桃山学院大学キリスト教論集』第36号，桃山学院大学総合研究所，2000，70

頁～75頁。

8）大橋昭夫，前掲書，136頁。

9）*Verbeck of Japan*, Ibid.; p.54.

10）『久保田町史』久保田町史編さん委員会，1971，149頁～150頁，324頁，436頁～439頁。

11）大橋昭夫，前掲書，23頁。

12）*Verbeck of Japan*, Ibid.; p.41.

13）高谷道男，前掲書，367頁。

14）大橋昭夫，前掲書，21頁。

15）高谷道男，前掲書，187頁。

16）*Verbeck of Japan*, Ibid.; p.213.

17）富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ，1985，315頁。

18）William Elliot Griffis, *Rutgers Gradates in Japan*, The Rutgers College Alumni Association, 1886, p.23.

19）『坂本龍馬辞典』新人物往来社，1968，153頁。

20）前掲書，150頁。

21）アーダス・バークス編『近代化の推進者たち　留学生・お雇い外国人と明治』梅溪昇監訳，思文閣出版，1990，160頁。

22）高谷道男，前掲書，巻末の年表，392頁。

23）『大隈侯八十五年史』，第一巻，原書房，1970，159頁。

24）『鍋島直正公伝』第六編，1920，313頁。

25）高谷道男，前掲書，142頁。

26）前掲書，119頁。

27）梅溪昇『お雇い外国人・政治・法制』鹿島出版，1971，35頁。

28）*Verbeck of Japan*, Ibid.; p.199.

29）Ibid.; pp.303-305.

30）Ibid.; p.306.

31）『鍋島直正公伝』年表索引総目録，1921，193頁。

32)『大隈侯八十五年史』前掲書，123頁～124頁。

33) 高谷道男，前掲書，391頁。

34) 杉本勲編『近代西洋文明との出会い：黎明期の西南雄藩』思文閣出版，1989，103頁～123頁。

35) 倉沢剛『幕末教育史の研究』第三巻，吉川弘文館，1986，1頁～2頁。

36) 杉谷昭『鍋島閑叟』中公新書，1992，38頁。

37) アンドリュー・コビング『幕末佐賀藩の対外関係の研究－海外経験による情報導入を中心に－』財団法人鍋島報效会，1994，14頁～22頁。

38)『鍋島直正公伝』第三編，1919，582頁。

39) 中村孝也『中牟田倉之助伝』，大空社，1995，155頁～159頁。

40) 中村孝也，前掲書，198頁～200頁。

41)『大隈侯八十五年史』，前掲書，117頁。

42) 以下，蕃学稽古所，致遠館に関する設立時期，経緯などは『佐賀県教育史・通史編』第四巻，佐賀県教育史編さん委員会，1991，『佐賀県教育史・資料編』第一巻，佐賀県教育史編さん委員会，1989，を参照した。

43) *Verbeck of Japan*, Ibid.; p.188.

44)『佐賀県教育史・通史編』前掲書，303頁。

45) 前掲書，321頁。

46) 前掲書，296頁。

47) *Verbeck of Japan*, Ibid.; p.131.

48)『大隈侯八十五年史』前掲書，122頁。

49) 高谷道男，前掲書，125頁。

50)『大隈侯八十五年史』前掲書，125頁。

51) 大橋昭夫，前掲書，18頁～22頁。

52) 砂田良和「フルベッキの運命」日蘭学会，『日蘭学会会誌』第18号，1985，109頁。

53) John R. Weinlick, Albert H. Frank, *The Moravian Church through the Ages*, The Moravian Church in America, 1996, pp.59-60.

54) James D. Nelson, 1993 Grolier Electronic Publishing, Inc., URL: www. mistral. co. uk/ hammerwood/ zinz. htm

55) Zinzendorf, Nikolaus Ludwig, graf (Count) von, URL: britannica. com

56) *The Moravian Church through the Ages*, Ibid.; p.66.

57) Ibid.; pp.106-107.

58) *Verbeck of Japan*, Ibid.; p.29.

59) Ibid.; p.41.

60) Ibid.; pp.20-21.

61) Zinzendorf: Theology In Song, an article from HP of Zinzendorf Jubilee 1700-2000 300 years by Comenius Foundation, URL: www. zinzendorf. com/ hymns. htm

62) *The Moravian Church through the Ages*, Ibid.; p.103.

63) John Jackman,Count Nicholas Ludwig von Zinzendorf, an article from HP of Zinzendorf Jubilee 1700-2000 300 years by Comenius Foundation, URL: www zinzendorf. com/ countz. htm

64) Beverly Prior Smaby, Moravian Women during the Eighteenth Century, an article from HP of Zinzendorf Jubilee 1700-2000 300 years by Comenius Foundation, URL: www. zinzendorf. com/ women. htm

65) *Verbeck of Japan*, Ibid.; p.24.

66) Ibid.; pp.23-24.

Criticism on the Study about Verbeck

Hisayo MURASE

Guido Herman Fridolin Verbeck, a native of the Netherlands, was one of the first Protestant missionaries sent to Japan by the Dutch Reformed Church in America. From the time he arrived in Nagasaki in 1859 he gave lessons in foreign languages, taught Western sciences and technology and introduced Western constitutions to young Japanese in Nagasaki. He even had Bible classes for certain inquirers in the hope of introducing Christianity rightfully and legitimately to Japan. He soon became popular among Japanese who desired to get modern Western knowledge. After spending about ten years in Nagasaki, he was invited to Tokyo to work with the Japanese Government and to help establishing the present Tokyo University. It was at this period of time that he contributed in various ways to the modernization of Japan.

Verbeck's life and work was first introduced in his biography, *Verbeck of Japan*, published in the United States in 1900 by William Eliot Griffis. Griffis himself was invited to Japan as a teacher of chemistry and science by Verbeck, and because he stayed with Verbeck for a while in Tokyo, he actually observed how Verbeck worked for and served Japan and her people. Although *Verbeck of Japan* is one of the most important documentations for research on Verbeck, its author Griffis made many historical mistakes and in some parts misunderstood the facts. Many historians seem to believe almost all the things Griffis said in his book and do not seem to question his comments. In this essay, I use many other historical sources to correct Griffis' errors, point out the mistakes the researchers made, and offer a more

accurate view.

During the period Verbeck stayed in Nagasaki, he taught at the Saga School which was financially supported by Prince of Saga. It is said that establishing the Saga School in Nagasaki is both Okuma Shigenobu and Koide Sennosuke's idea and it was they who invited Verbeck to their school as a director. Yet the details of the Saga School do not seem to have been told so far by any researchers. I try to clarify when and how Okuma and Koide tried to establish the Saga school.

Although Verbeck went to a Presbyterian theology school and was ordained as a Dutch Reformed missionary, he was educated at the Moravian school in Zeist in the Netherlands and belonged to the Moravian Church until he entered Auburn Theology School in America in 1856. In my opinion, Verbeck was affected in many ways by the Moravian Church, as can be observed from the way he conducted mission work and preached the gospel. Since the Moravian Church has never been introduced to Japan, there are very few researchers on Moravian Brethren and practically nobody has studied the relation between Verbeck and the Moravian Church. It is necessary to take his original denomination into consideration to understand Verbeck's way of engaging himself in missionary work.